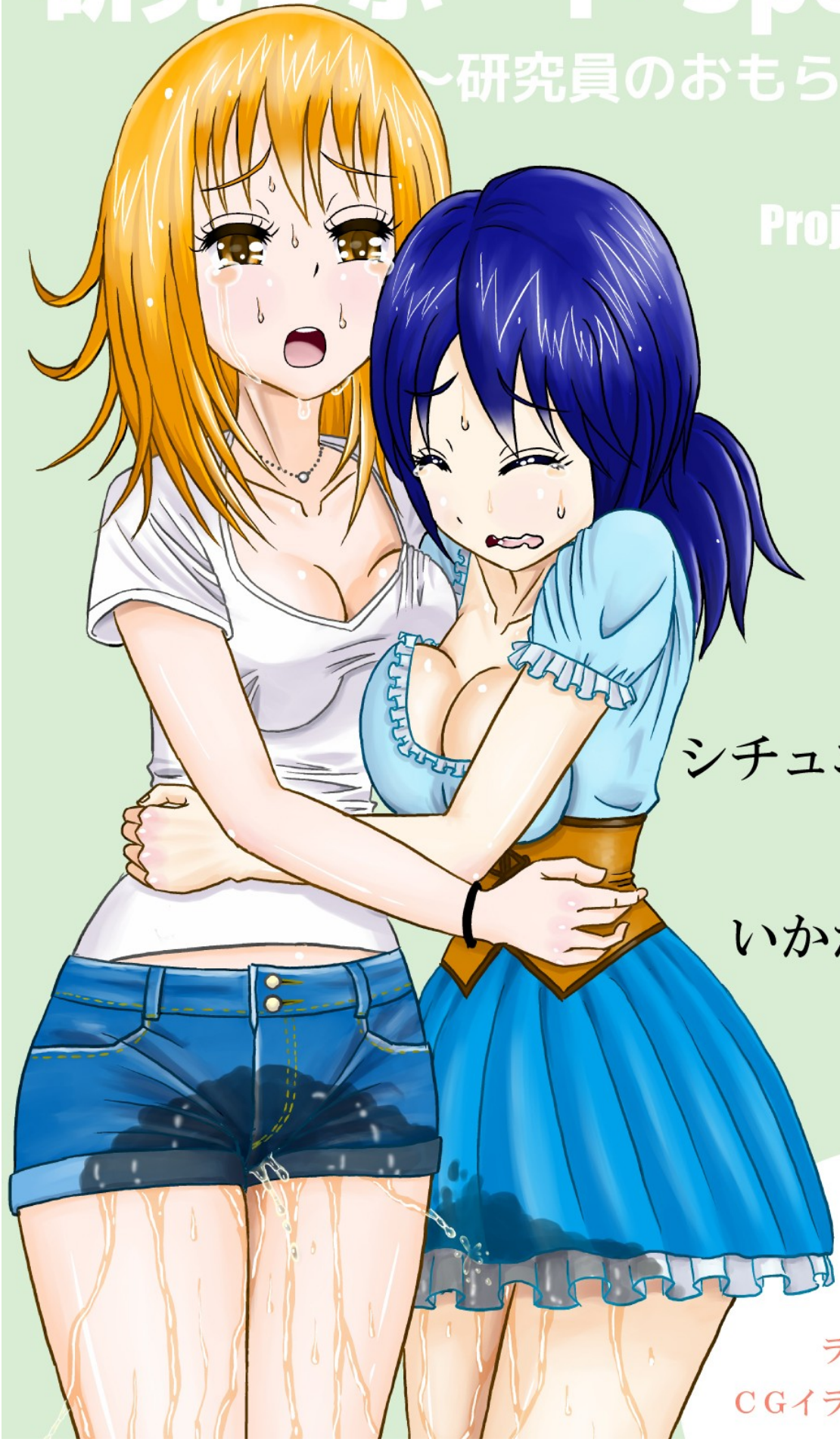
研究レポート Special

～研究員のおもらし日記～

Project Of Dr.Q



シチュエーション
おもらし、
いかがですか？

ライトノベル全七話
ＣＧイラスト計４２枚収録

研究レポートSpecial

～研究員のおもらし日記～

Dr.Q

プロジェクトオブドクターキューとは？

女の子のおしっこおもらしを観察して楽しむ、というプロジェクト。所長のドクターキューを筆頭に、ナオミと風香が架空の研究員として所属している。

主な活動内容は、ブログサイト運営、同人誌制作・販売、ＣＧイラスト制作など。

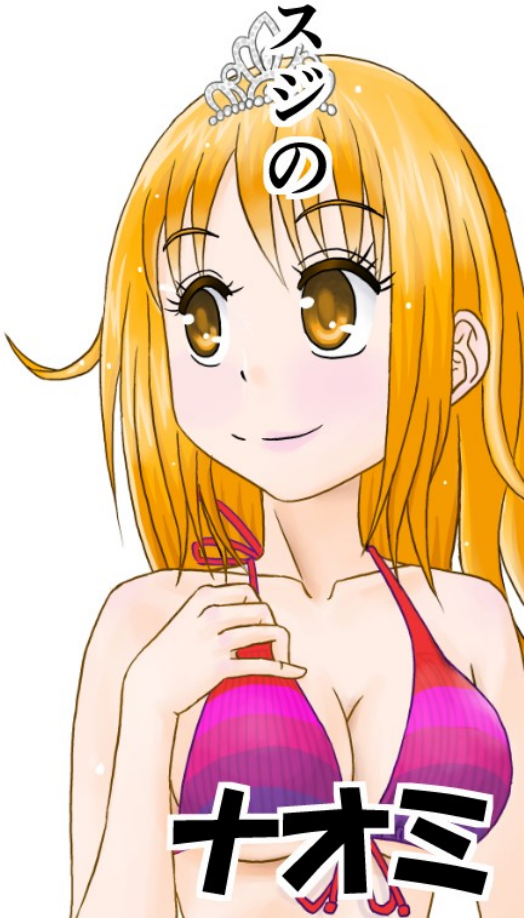
２０１３年２月から所長の体調不良を理由に活動を休止していたが、２０１４年４月に活動を再開。さらに「おもらし道」を追求するために、電子書籍販売やゲーム制作など、活動の幅を広げようとしている。

特に断りが無い限り、プロジェクトオブドクターキューでの出来事は全て架空のものである。

研究員紹介

おしっこを限界まで我慢するのが大好き、
限界を超えておもらししてしまうのが
大大大好きという変態。
普段は極度の恥ずかしがり屋で、
異性と普通に話すことが出来ない。

未だにおもらしやおねしょが
治らないという悩みを持つ。
最近、アソコが天然パイパン&一本スジの
持ち主だということが判明。
これが死ぬほど恥ずかしいらしい。



その一「真夏の怪談おもらし」

皆の者！　ごきげんよう。ドクターキューである！

夏といえば真夜中の怪談！　そして怖くて一人でトイレに行けなくなる！　誰かについてきてもらって何とかトイレに向かうが、途中で怪奇現象が起こり恐怖のあまり失禁！

……というパターンが王道だと私は考える！

恐怖失禁についてはプロジェクトオブドクターキューではあまり取り上げていないので、今回は研究員の二人を使って実験を行いたいと思う。

と言うわけで、とある蒸し暑い真夏の夕方に研究員の二人をラボに呼び出した。

「所長～。何なんですか！？　今日は友達とドライブに行く予定だったんですけど」

ナオミ君は急に呼び出されて機嫌が悪い。ともあれ相変わらず大学生ライフを楽しんでいるようだ。

「……しょしょしょっ、所長っ！　こここここ、こんばんは……っ！」

風香君も相変わらず私と話すときは緊張しているようだ。彼女はプロジェクトオブドクターキューに加入してそろそろ三年になるのだが、全く私に慣れてくれないのが少し悲しい。

「諸君、本日呼び出したのはだな、いつも研究を頑張ってくれているので、そのお礼に真夏の思い出を作ろうと思うのだよ！」

まずは甘い言葉で誘い込むことにした。

「え！？　真夏の思い出！？　いいですね！」

ナオミ君が早速興味を示す。こういうイベント事は大好きなはずだ。

「……すす、素敵です……っ！」

内気な風香君も意外とまんざらでもない様子。

……ふふふ、簡単に引っかかったな。

「だぁーっはっはっは！　満場一致だな！　それでは、プロジェクトオブドクターキュー真夏のプチキャンプを執り行わせていただこう！　全部私のおごりだ！　パーとやろうではないか！」

「やったあ～～～～！」

「あ……、ありがとございますっ……っ！」

「まずはバーベキューだあああああ！」

ラボの外に庭があるのでまずはそこでバーベキュー。実はバーベキューはあまりやったことないので色々と手こずってしまったが、ナオミ君が慣れていて助かった。危ない危ない。場が白けるところだった……。肝心の食べ物は……ナオミ君がてきぱきとやってくれたお陰でうまい！　ナオミ様々だ。将来、彼女は意外と良いお嫁さんになるんではなかろうか。食材はそんなに高い物は使っていないのだが、バーベキューで食べると格段に美味くなるので不思議だ。ビールも進む！　ナオミ君もかなりビールが進んでいる。風香君はあまりお酒は飲めないらしく、烏龍茶で済ませている。

「次は花火だあああああ！」

酔っ払った私は打ち上げ花火を両手に持ってはしゃぐ。危険なので真似しないように。

「あはははー！　所長！　危ない～！　ひゃあああああ！」

同じく酔っ払って派手な花火を振り回しはしゃぐナオミ君。若いなあと思う。

「き、綺麗ですね……」

はしゃぐ私やナオミ君とは対照的に、手に持った線香花火をかがんで静かに眺める風香君。その姿に線香花火と似たはかなさと大人の色気を感じ、酔いに任せて口説きそうになってしまった……。

さて、ここまではいわば前座。まぁ思った以上に楽しかったが……。

「最後に！　本日のメインイベント！　真夏の夜の怪談話だあああああ！」

「いえ～い！」

「ふふふ……、て、定番ですね……っ！」

二人ともノリノリだ。さっきまでのバーベキューと花火が功を奏して、スムーズに事を運べた。ここまでは大成功。

場所をラボに移し、照明を消し、ろうそくに火をつける。これだけで雰囲気が出るから不思議だ。

「い、意外と怖いですね……」

風香君がぽろっとこぼした。さっきはノリノリだったものの彼女はこういうのは苦手そうだ。

「それでは私から……」

三人でろうそくを取り囲み私は話を始める。研究員の二人はゴクリと唾を飲み込む。

話し始めた私の吐く息で、ろうそくがゆらゆらと揺れる。

私は淡々と話を進める。

「こういう雰囲気では日本の怪談を話すのが普通だが、今回は海外の怪談にしようと思う」

「ジェイソンについてだ」

「フルネームは、ジェイソン・ボーヒーズ。身長一九二cm・体重一一四kgと大柄で筋肉質な体格。常人の二倍はある心臓と異常に小さな脳を持っていて、先天性な病により顔が奇形になっており、これがジェイソンを殺人鬼に変えた最大の要因である」

「ジェイソンは少年期、少年少女のいじめに遭い湖に突き落とされ、消息不明になってしまう。それが原因で、ジェイソンの母親は精神に異常をきたし、殺人を繰り返すようになる」

「しかし、十三日の金曜日、ジェイソンの母親は被害者の一人であるアリスの反撃によって首をナタで切断され死亡。」

「偶然にもその現場を目撃したジェイソンは母親の復讐を誓い、事件から二ヶ月後にアリスを殺害。それからジェイソンは殺人鬼となり殺人を繰り返すようになる」

「その後、ジェイソンは襲った被害者からの反撃で死亡するが、死後から十年後、雷に打たれそのショックで蘇生。不死の体を手に入れる」

「そして、ついには他人の体をも乗っ取り永久に殺人を繰り返すようになってしまった……」

しばらく間を置く。

「……。ナオミ君、風香君……。今日は何日だ？」

私は二人に問いかけた。

「え……？」

ナオミ君はバッグからスマホを取り出して日付を確認し、青ざめた顔で声を発する。

「じゅ……、十三日の金曜日……！」

再び間を置く。私は視線を二人の後ろに移し、何かに気付く。

「あ……ああ……」

私は声にならない声を出す。

「しょ、所長……？」

ナオミ君は、私の異変に気付き、声を掛ける。風香君は恐怖で体が硬直している。

そして私は青ざめた顔をし、手を震わせながら二人に後ろを指さしながら叫ぶ。

「ナオミ君、風香君！　後ろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「いやあああああああああ！」

叫んだ私に驚くナオミ君。

「……っ！」

風香君は声も出ない様子。耳を塞いでうつむき、ただただ震えている。

「だあーーーっはっはっは！　存分に驚いてくれて私は嬉しいぞ！　と言うわけで私の話はこれで終わらせていただこう！」

そういって私はラボの照明をつける。

「所長……！　マジで怖すぎますよ！　ヤバイ！」

半泣きで怒ったように言うナオミ君。

「……っっ！」

風香君はまだ震えている。

うむ。即興にしてはよく出来た。

「んっ……」

ナオミ君がブルッと身震いした。

「ちょっとビール飲み過ぎちゃった……。ちょっとお手洗い行ってきまあす。風香さあ～ん、怖いからついて来てくださいよおおお～」

ヨシヨシ！　来たあああああ！　と私は心の中で叫ぶ。

風香君は目を伏せ耳も塞いでいるので、ナオミ君の呼びかけが聞こえず応じる事が出来ない。

「風香さん！　もう所長の話終わってますよ！　わたしより年上なんだからしっかりしてくださいよ～」

そう言ってナオミ君は風香君を立たせる。

「ぐすっ、うううううう～～～……」

風香君は完全に泣いてしまっている。脚がガクガク震えている。ここまで怖がられるとちょっと申し訳ない気持ちになってくる。だがしかし任務は続行だ！

ナオミ君は風香君をなんとか抱きかかえてラボを出ていく。それを確認した私は、すかさず窓からラボの外へ出て、女子トイレの近くまで先回りする。

すると二人が怖いのか抱き合いながらヨタヨタと歩いてきた。二人の会話が聞こえてくる。

「風香さん、大丈夫ですか？」

ナオミ君は心配そうに風香君へ声をかける。

「う、うん……」

風香君は大分落ち着いたようだ。しかし、まだ少し脚が震えている。

「わたしびっくりしてちょっとちびっちゃいましたよ～」

「じ、実は私も……」

何だと！　くそっ、彼女らのパンツをこっそり見ておけば良かったと少し後悔した。

「完全にもらさなくて良かったです……。また所長のネタにされるところでしたよ～」

ナオミ君はアハハと笑いながら冗談っぽく言う。もちろんそのつもりだ。

「わわわ私はそれでも……っ、しょ、所長のお役に立てるなら……っ！」

「えっ、風香さん、それどういう意味ですかあ～？」

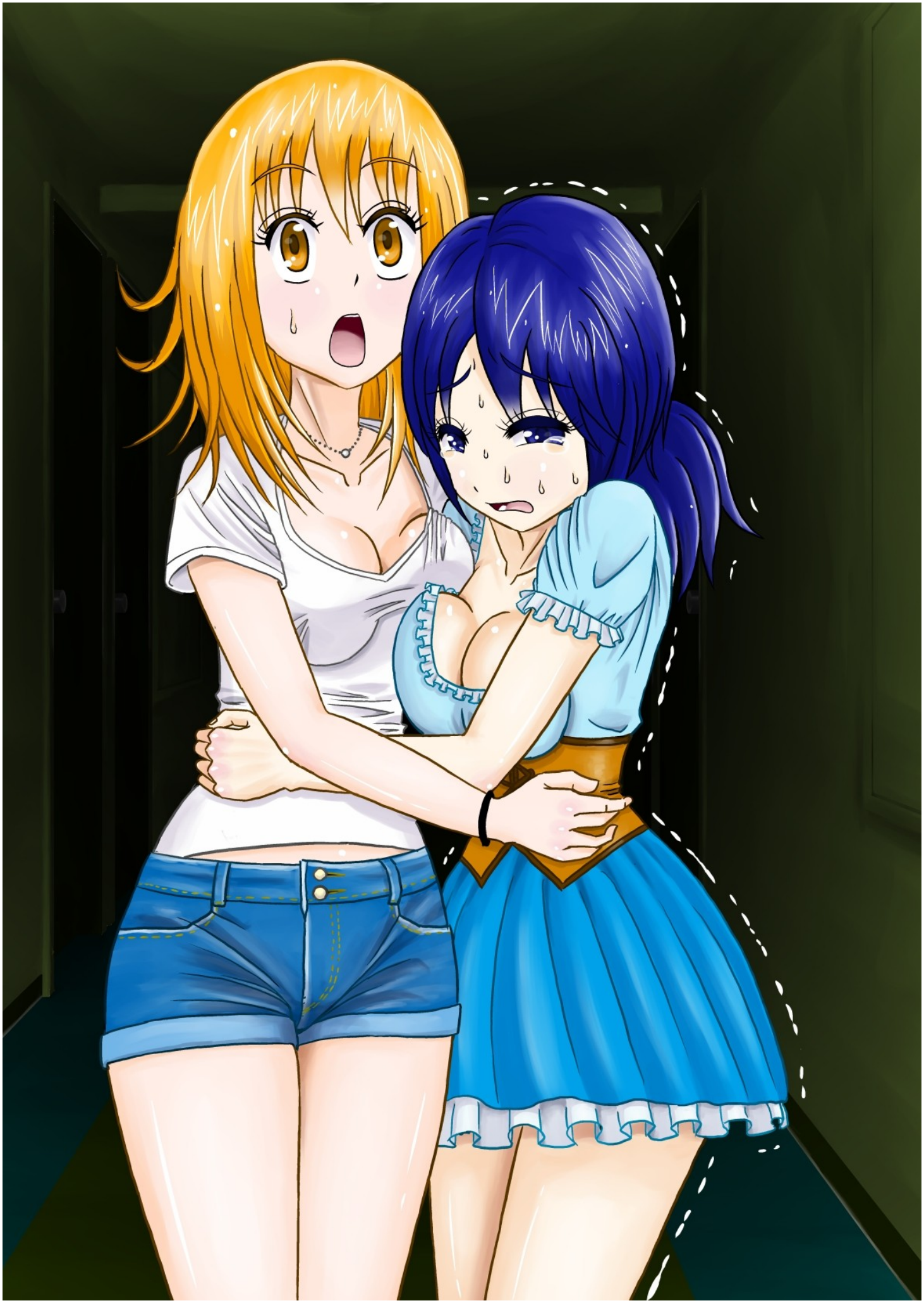
ナオミ君はニヤニヤとしながら、恥ずかしがる風香君の顔をのぞき込む。私もそれは気になる！　が、実験を遂行するために、タイミングはここしかない！

私は廊下の照明を切った。真っ暗になる廊下。

「え……！？」

「！？」

二人とも驚いて目を丸くする。



そして私は、この建物の放送設備をリモコンを使い遠隔操作で作動させ、廊下に設置してあるスピーカーからラップ音を大音量で流す！

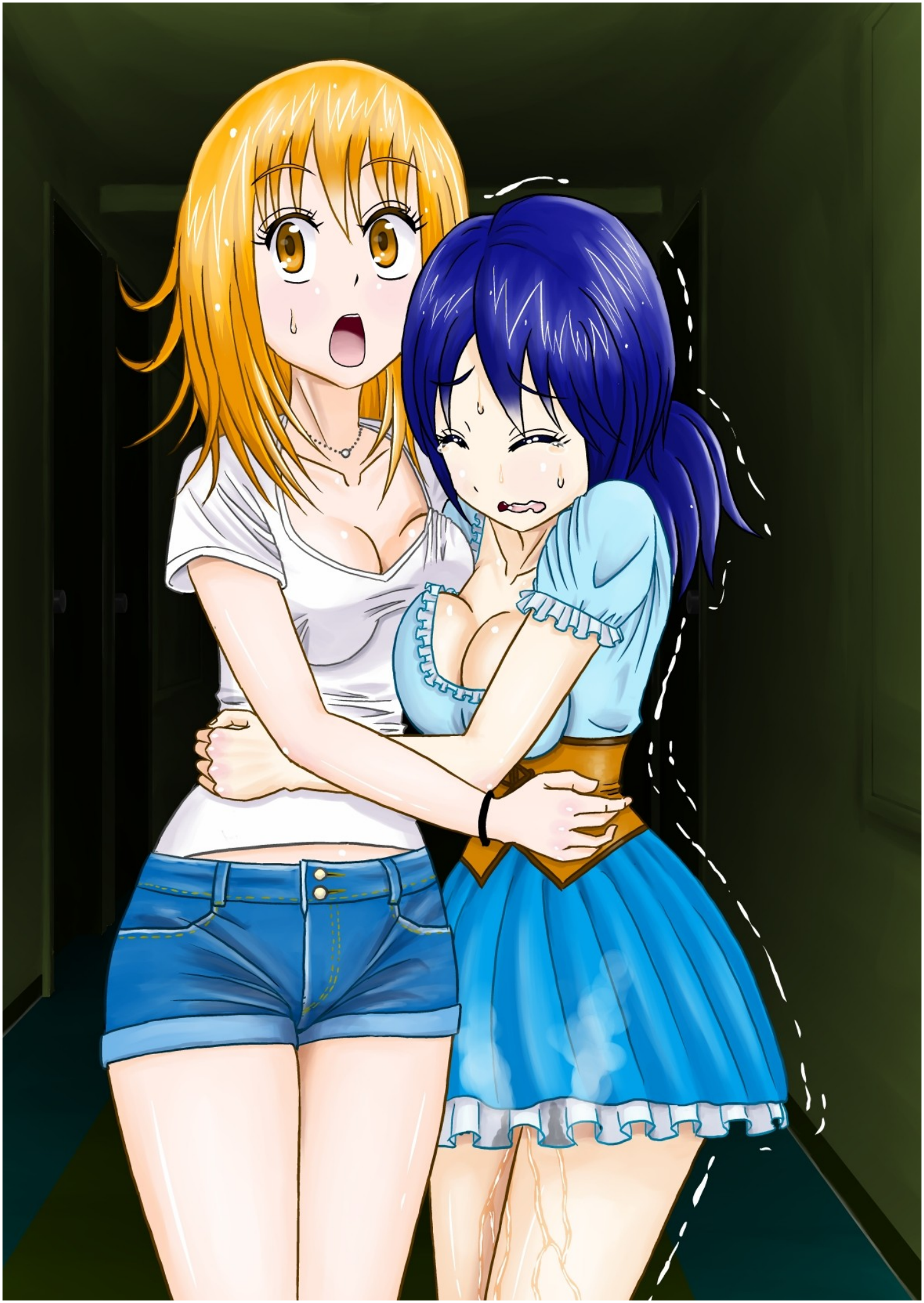
ピシッ！　ピシッ！　パーン！　という音が廊下に鳴り響く。

「ナ……ナオミちゃん……こ、怖いよ……」

風香君は耳を凝らさないと聞こえないような小さな声は流しているラップ音に掻き消され私には聞こえることはなかった。

彼女の穿いているフリル付きスカートの裾からちろりと左脚に一筋の雫が流れる。さらに右足にもう一筋の雫が流れ、やがて止めどない流れへと変わっていく。

風香君は恐怖のあまり失禁したようだ！　勢いのないおしっこがスカートの裾を濡らし、脚をしたたり、足下にゆっくりと水たまりを作っていく。いま私が掛けているこのサングラスは赤外線センサーを搭載しているので暗闇でもその姿を逃すことなく確認できるのだ！　恐怖の演出はまだまだこれからなのだがグッドとしよう！



無料サンプルはお楽しみ頂けましたか？

この続きが気になる方は……

本の詳細をチェック！